

# 大学の世界展開力強化事業 取組概要 名古屋大学

## 【構想の名称】(選定年度24年度(申請区分(II)))

ASEAN地域発展のための次世代国際協カリーダー養成プログラム

## 【プログラムの目的・養成する人材像】

グローバル化による経済環境や国際協力活動の変化に対応するため、開発援助とビジネスの間をつなぐ視点を備え、ASEAN地域と日本双方の経済・法・政治・社会・文化の共通理解をもった次世代国際協カリーダーを養成する。

## 【構想の概要】

名古屋大学とASEANの7大学がコンソーシアムを形成し、英語によるコースワークとフィールドワーク・インターンシップを組み合わせたカリキュラムを開発する。SEND該当者は日本語指導支援の他、日本の法制度や文化について紹介活動を行う。

## ■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

(2013年度学生フォーラムで発表中の学生)

### ○ 質保証に関する組織的整備

国連地域開発センター等からの外部評価委員を招聘し第2回評価・質保証委員会を開催。各加盟大学代表と単位互換、成績評価に関する議論・質疑応答を行った。

### ○ 単位の相互認定制度における情報収集および構築

長期派遣・受入学生の単位互換の相互認定は加盟大学との間でカリキュラムやシラバスの情報共有や、指導教員同士の交流により、平成25年度の留学生はほぼ単位認定が実現する見込み。成績評価については、UCTSに基づく成績の併記を加盟大学と調整中。

### ○ 質の高い教育体制

第2回評価・質保証委員会において単位認定、成績管理システムに加え、①語学力、②異文化理解活用力、③社会人基礎力、④コミュニケーション・プレゼンテーション能力の評価基準に関する議論を行った。②に関してはVALUE Rubric方式を、③に関しては経済産業省の基準を採用し、更に、ASEAN各国の基準を取り入れた包括的な基準を策定することに関し合意を得た。

## ■ 交流プログラムの内容、今後の開始に向けた準備状況

(第2回評価・質保証委員会の様子(平成26年3月13日))



### ○ 中部産業のモノづくりによる人材づくり

名古屋大学がアジア最大の産業基盤に立脚することを利用したモノづくりの拠点(トヨタ自動車、デンソー、DGM森精機、ブラザー工業等)におけるインターンシップの成果が報告され、その質の高さに平成26年度、加盟校3校が新規に参加を希望。

### ○ SENDによる日本語教育支援・日本文化紹介活動

SEND短期派遣の経験者が長期派遣を希望する理想的なケースが出てきた。SEND長期派遣の経験者は、コースワークに加え、現地でのインターンシップに参加し成果を挙げた。また、現地語での会話も修得し、日本語、文化紹介活動に役立たせた。

## ■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

### ○ 日本人学生の派遣

平成25年度より学部生・大学院生、計56名を派遣し予定数を上回った。カンボジアにおけるField Workへの参加者が予想よりも増加した。SEND該当者は16名。

### ○ 外国人留学生の受入れ

平成25年度は学部生・大学院生、予定数48名に対し26名を受入。産学連携によるインターンシップの成果が加盟校間に共有され、平成26年度は受入数は大幅に増加する予定。

	H24	H25	H26	H27	H28
学生の派遣	11	56	52	52	52
学生の受入	0	26	48	48	48

## ■ 日本人学生の派遣・留学生の受入を促進するための環境整備

注)H24、25は実績、H26以降は計画

### ○ 派遣前準備教育

平成21年度より英語新カリキュラム「Academic English」を設け、英語力強化に取り組んでいる。平成24、25年度短期派遣学生にはオリエンテーション、事前研修などを実施。さらに、名古屋大学の教育学習支援システム(NUCT)やインターネット上のフリークラウドなどを利用し、情報や状況把握の共有化を実施中。危機管理を含めた出発、帰国までの支援体制を整備している。平成25年度末に開催された学生フォーラムに本プログラム参加学生が全員参加し、情報提供したため、平成26年度のプログラム参加予定者は増加傾向。

### ○ 教育支援・宿舎等

演習等の授業にTAを配置し、留学生の特別な学習ニーズに対応するなど支援体制を整えている。この他、国際教育交流センターにアドバイジング部門が設置されている。また、新規渡日留学生用に約80戸分の宿舎を確保している。さらに、国内外のインターンシップ先(特に上記産業基盤におけるモノづくり企業)の開拓を本格的に実施している。

## ■ 教育内容の可視化・成果の普及

### ○ 国際シンポジウムの開催およびウェブサイトでの公開

平成26年3月13日、第2回運営委員会後、学生フォーラムを開催し、本プログラムに参加した学生全員が留学体験をプレゼンテーションした。その内容はコースワークに限らず慈善活動やインターンシップ、フィールドワークなど多岐にわたり、参加学生が予想以上に積極的に活動し、異文化理解、現地語の習得、さらにプレゼンテーション能力の向上など見るべき成果が出たことが文部科学省専門官、外部委員、加盟校代表、名大関係者の間で共有された。一方本プログラムの概要に関しては、ラジオ放送ホームページ、Annual Report 2013、Facebook等により情報発信を強化している。